



Title	北海道經濟史管見
Author(s)	南, 鉄蔵
Citation	北海道大學法經會論叢, 13, 96-111
Issue Date	1953-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/10746
Type	bulletin (article)
File Information	13_p96-111.pdf



[Instructions for use](#)

北海道經濟史管見

——明治維新前——

南 鐵 藏

九六

一、維新前北海道經濟史の我國經濟史上における重要性

明治の初期わが国と源流を異にした歐米科学の急激な流入は、却つてわが国固有の文化に対する反省を促進せしめ、日本歴史學派の誕生、日本經濟史研究熱の勃興となつたが、これに採り容れられた明治維新前における北海道經濟史の地位は、本島が国史上国初以来の久しい關係を持つていたに拘らず、不当に無視せられて来た。その原因は其位置が極めて特殊であるということであるが、それかといつてこれを無視することは許されない。而も北海道においてはその特殊事情のみを強調して、日本經濟史全体における關係を無視してきた。此処に本史の日本經濟史完成上に缺くことの出来ない重要任務がある。

次に国初以来のわが国農本主義は、特に本史の時代である徳川幕府時代において其最高潮に達し、斯業が當時の支配的産業であり、而も組織の完全さにおいて、世界史的典型と評せられた封建制度の基礎となり、これを通じて經濟の發展も行われたが、独り本島のみは他と異り、米作は勿論農事は殆んど発達せず、住民生業の大勢は天恵の漁獵に依存し恰も漁業国を形成し、この点では明治維新前の北海道經濟史は漁業經濟史と称すべきであつた。しかしそれは單なる採取經濟自然經濟に止らず、既にある程度まで生長したわが国商業資本家の進出対象となり、疾くから交換經濟に入り込んでいた。しかし一方においては、政治的には封建制度が支配的であつた為、その支配者たる松前氏も立藩制度として封建制を執つたが、その財政的基礎はこの漁業・商業に拠らねばならず、従つて采邑も内地の農地及び年貢とは異り、広大な蝦夷地では「場所」と呼ばれた漁場であり、農民相手の貢租關係ではなく、蝦夷相手の交易の独占であり、その労力を

強制的に利用する漁業であつた。本島經濟の發展は斯くして内地とは全く異なる封建制度を通じての場所請負人を中心勢力とした商業資本主義的活動に因つたのである。其後国防問題が起るや、前後二回に亘る資本力と組織力と智力とを持つた幕府自ら、わが国に未だ經驗しなかつた大規模な經營を試みて、更にこの方向に新生面を開き拍車を加えた等は、内地の何れにも見られなかつたわが國經濟史上の特殊な流れであつたであらう。又この間異民族としての蝦夷は内地に在つては、疾にその消息を絶つたが、独り本島にのみ最後迄遣り、採取を基礎とした自然經濟を営み、而も本史の過程中重要な部分として織り込まれたのであつた。更に明治以後重要となる農業・牧畜等の産業技術及びその上に立つ組織について觀れば、北海道を処女地とするが故に、その採用發達の過程が古い土地では定められない鮮明さをもつてゐる以上のような本島經濟史上の特殊性は、日本經濟史を綜合する上に必ずや把握しなければならない重要さを感じるのである。

二、維新前北海道經濟史の過程

本史は天正十八年松前藩の成立した頃より其時期的区分として大略準備時代・勃興時代・爛熟時代を辿つて、明治に流れ込んだことを想定するが、併し本史に入るに當りこれを理解する為に、先づこれに先き立つ時代の本島經濟情態より出發する。

【松前藩成立以前の本島經濟情態】 先住民族たる蝦夷が採取經濟を基調として自然經濟を営んでいた。其処には未だ農業も入らなければ交換經濟も支配的では無かつた。何故ならば本島では少くも足利時代末期迄は、わが國中央や本州人との交渉も殆んどなく、蝦夷の棲むが儘に任せてあつたからである。併し仮令斯かる時代に在つても、本島蝦夷は既に農業時代而も交換經濟が貨幣經濟にまで進んだ大和民族との間に、甚だ緩慢的、部分的、小規模的ではあつたとしても交易が行われ、其起原的には朝貢という形式で疾くより、また本来的には遅くも二、三世紀頃よりこの現象が見られた。その交易形式は恐らく所謂敵對的沈黙貿易ではなく、平和的談合交渉に擬つたものと推測される。その理由は起原的な朝貢より考へても、又一般交易の場合を以てしても、内地には既に熟蝦夷ニキが居り、交易は彼等を介して営まれたかと考へられるからである。これら接觸の迹は、当代としては日本經濟史研究上に一つの新しい觀察を加えたことゝなると思ふ。

産業の發展はいう迄もなく、交易の發展に俟たなければならぬし、また交易の發展も、産業の發展に依つて初めて可能である。奈良朝前後より以降ともなれば、わが国の統一及び勢力の伸長により和人との交渉が一層活潑に行われるようになり、また他方この時代になると、ある程度の和人の土着を見、従来殆ど蝦夷ばかりを相手に交易していた内地商人は、更にこれら内地よりの移住土着者と結び付いての交易が展開せられるに至つた。しかしその交易とても、本島住民經濟の支配的勢力を持つ迄には未だ至つていなかった。即ち奈良朝頃に入れれば、未だ考古学的史料時代は脱し得ないが、蝦夷と大和民族間における交易の活潑化は、蝦夷を鉄器の使用にまで高め、更に平安朝以降になると、漸次文献的史料時代に移行したが、従来の交易的朝貢も、わが国の皇威衰頹と共に、何時しか出羽の豪族安倍氏への貢納に移つたものゝ如く、爰に従来の交易的朝貢は去り、蝦夷交易は次第に民間相手となり、鎌倉時代よりは、明に本島は安倍氏を名乗る津軽の安東氏の支配となり、更に次の足利時代になると、蝦夷交易の情勢は一層明になつてきた。即ちこの時代になると、安東氏は南部氏の圧迫のためその居城を従来の藤崎より十二湊へ移したが、この湊へは当時南方よりは上方地方の商船、北方よりは恰も蝦夷が松前藩の謁見のため松前へ毎年恒例として土産物を持参したように、安東氏えの儀礼の爲土産物を持参して松前家方より赴いた家臣等の派遣船と同じく安東氏えの貢納の爲に赴いた蝦夷船等本島より多くの船舶が参集したが、また彼等はこれを機会に交易を営んで帰帆したのである。そして安東氏は本湊でこれら内地の商船を始め本島よりの和夷の船々より貢納の受納、商船税の徴収をなし、またこれらの管理もしたことを思われる。而して少くもこの足利時代初期より津軽へ往來したこれら蝦夷商船は、その末期には十三湊で盛んな交易景況を示していたのであつた。しかし一方また当時本湊は、本州より蝦夷地へ渡る要津でもあつたといへば、本州人強ち居坐り交易をしていた者ばかりとはいえず、彼等の中には反対に蝦夷地へ交易に向いた者もあつたかと考えられる。その後十三湊の居城は更に秋田に移つたが、この時になると従来松前方よりの十三湊往來は転じて秋田となり、秋田人もまた十三湊の場合のように本島へ交易に往來するのであつた。交易品はその初期に在つては、毛皮・装身具等の贅沢品が擧げられたが、後になると少くも蝦夷よりの移出品は、毛皮・干鮭・干鯨・鷺羽等で、生活必需品が主となつたが、しかし毛皮は何れにしても、その中心勢力を成し、恰も本島当時の内地移出は、毛皮支配時代とも謂う可き觀を形成していたことで、これ當代としては特に注目すべき傾向であらう。斯くして従来迄明瞭を缺いていた本州人が蝦夷に結んでいた交易の経緯は、この期に及んで稍々明かにするを得たといえる。

以上の如く本史以前の本島は、大体蝦夷の活動舞台であつたが、南方なる大和民族の勢力は、何時迄もこの状態の儘には措かなくなつた。文治以柔勃々彼等の本島到来が始まつていたが、足利末期頃になると、恰も内地で国初鉱業が最初の現れとして砂鉄掘が盛んに営まれたと同様、この地でも砂金掘と沼鉄鉱を利用した鍛冶屋の移民部落が、知内の砂金・函館の鉄鉱を中心に函館より江差へかけて点在していた。恐らく生産費の最小を目し、地価の低廉と、最も採掘に便なものととして、未開の本島における斯鉱を選んだ東北地方の金掘等が手をこの島に延ばしたものであろう。併し大和民族の本島への伸長は、斯く庶民ばかりでなく、彼等の間には更に安東氏に隷属した豪族が各々館を構えて割拠しその治安に當つており、少くも本島初期の封建的とも称すべき社会を形成していた。斯くして和人は士庶両民共に漸増し、日用品の需要また次第に増加するに至つて、内地商賈は蝦夷相手ばかりでなく、本島和人間とも交易上の緊密な關係を結ぶ形勢となつた。而も恰もこの時内地では南方海外へ發展しつゝあつた商業的勢力は、その後漸次外商の圧迫に会い、その一部である越前・若狭を根拠とした商船は鉾先を反転して、足場を本島函館・松前に延ばし始めた。一方この足利時代長祿頃より豪族や蝦夷を統一し商稅船に抱りつゝあつた松前藩祖五代が現れ、その五代目なる慶広よしまに至り、遂に一藩として独立するに至つたが、この頃近江商人にして特に慶広の優遇を享け、ギルド的組合を組織した江州両浜組が出現し、爰に本島に初めて商業資本主義的活動を表面化し、本邦独特の松前封建制の裡に、本邦に特有の内容を有つた前期資本主義的經濟發展時代へと移行せしめるに至つたものである。次は本史即ち松前藩成立以降の時代である。松前氏（慶長四年迄鷹崎を氏とした）は天正十八年十二月豊臣秀吉の天下統一を期し、津輕安東氏の羈絆より脱し独立し、蝦夷交易と沖ノ口税を以て主たる立藩財政の基礎としたが、これはまた同時に本島前期商業資本主義經濟發展の基礎ともなつた。しかし斯かる發展は、この藩是の基礎確立と同時に開始せられたのではなく、その間には過渡期なるものが存在した。これを準備時代と仮称する。

【準備時代】 この時代の特徴は「場所」と称する蝦夷地知行における蝦夷交易が未だ商賈の手に移らず、知行主自からか若くは多くの場合、唯その代理としての内地商賈に依つて営まれ、謂はば士商の交易であつた点に把握される。しかし又蝦夷交易は斯く当準備時代ばかりでなく、其以降明治に至る迄の本島經濟發展の基本となつて進められて行くのであつたから、これを理解することまた最も肝要であると思われる。松前氏の立藩財政基礎の一半が商船税に在つた事は、既に藩祖時代以来で、即ち内地より到来する商船税にこれを求

め、永正十一年津輕の安東氏の代官として本島統治権を獲得してよりは、これを更に制度化した事に徴しても明白であるが、又他に重要な一半があつた。當時の本島は内地とは異り、農業の如きは本吏全代を通じてさえ未だ試作程度に過ぎなかつたので、松前氏も立藩財政の基礎としては島民生業の現状に基き、知行も内地の作物育成に俟つたのとはその趣を異にし、天恵の漁獵という自然採取に拠り漁場を充当するより外途はなかつた。而も狹隘な和内地の貢租のみの収益では藩費も償ひ得ないようになり、勢い隣接の曠大な蝦夷地の漁産物を主とした富源に着目し、蝦夷と平和裡にこれを交易によつて獲得する事が最も有利と見たであろう。このところに本藩の封建財政基礎の一面は漁獵を主とする採取経済を独占的商業と結び付けた「場所」(蝦夷地知行)における蝦夷交易に置かれるという内地何れの藩にも曾て見る事の出来なかつた本藩独特のものが形成された。即ち天正十八年慶広上絡して秀吉に謁し、蝦夷島主の待遇を受け、爰に初めて安東氏の羈絆を脱し独立し、文祿二年名古屋で制書を賜つた。併しこの時の制書では蝦夷保護の任と共に、内地より到来の商船税徴収権という唯従来の既得権をこの際改めて公認せられたというに過ぎなかつたが、更に慶長九年徳川家康より賜つた封疆制禁の制書になると、秀吉の制書の場合よりはなお広く蝦夷交易独占権の公認をも獲得した。これ、内地商業資本家勢力の本島進出に結び付いて本島前期商業資本主義的経済発展の基本を成したところの場所制度による公式な蝦夷交易がこれより出発したので特に注目されねばならない重要な点であつた。場所における蝦夷交易は、初めは知行年の蝦夷への土産物(又は贈物)に対し、これに相当する當夷の贈り返しという原始的形式を持つ慣習が、オムシヤの儀式を通じて行われたのであつたが、後両者の勢力に懸隔が生じて来ると、蝦夷撫育・蝦夷教育或は蝦夷介抱といったような美名の下に、純粹な経済的目的より蝦夷地産物獲得の爲の交易となつた訳である。而して当代の蝦夷交易にて注目されるべき点は、交易は和夷両者の地位が対等であつた事、本島よりの移出は大体前代迄干魚獸皮中心であつたものが、当代では魚肥・昆布の中心へと移行した事、和夷交易活動の地的範囲は、前代は蝦夷の方が積極的に遙々奥羽地方迄出掛け、彼の地が交易市場で内地人は居坐り交易をなし、その活動の地的範囲は、蝦夷において広く、内地人これに反していたが、これが当代になると逆転して、内地人が本島に手を伸ばし、蝦夷地が交易市場で、蝦夷は居坐り交易となり、両者の活動範囲は前代とは正反対となつた事である。而も特に前史と本史とを区劃づける基本的勢力ともいふべき両浜組というギルド的組合組織を以てした江州商人等の特権的本島漁業・商業の活動、又特に高利貸資本的な藩内日用品の仕送り等、資本主義的活動といったこれらの表面化は、当代として最も注目すべき現象であつて

これらの表面化した活動は、また鑿て次の勃興時代を生む原因を成すに至つたのであつた。以上の情勢下における本島産業としては、漁業は和人蝦夷共に旧来よりの主要産業であり、恰も内地における農業と同様、而も砂金・木材等の如く産地が局限せられず甚しい盛衰が無いため、和人・蝦夷の生計を助け、而も商業を通じて農業を主とする内地の経済と結び付き、本島経済発展の基本を成した地位に在つた事既述の如くである。漁獲物の種類としては、鮭は松前産物中の大宗であり、鮭これに重く重要さをもち蝦夷地に多く、昆布は東部に饒しい産物で、何れも内地移出の重要産物であつた。狩猟としては鷹・鷲羽・鶴・鹿皮・熊皮・熊胆・臘虎皮・臘腸膾・海豹皮等が内地人に歡迎されたが、殊更鷹は古来より松前の名産で、これを捕える鷹打場は知行の一で松前藩の一大財源であつた。鉱業では砂金以外に見るものなく、その採取最も古く、又当代盛んにこれを営んだが、殆ど採取し尽し寛文九年の蝦夷乱を契機に頽廢に歸した。しかるに幾何もなくしてこれに代る一代富源として江差松山を主とした蝦夷松山・雜木山等の森林伐採事業が勃興した。しかしこれも濫伐・盗伐・山火等の為漸次衰頹する一方であつた。而して砂金堀にせよ、山師・柚取にせよ、何れも内地人の進出においてこれを見た事は、日本経済史上北方発展過程として注目されねばならない。農業としては畑耕作では、和夷共に当時は焼畑式で、記録上では寛文九年頃福山地方の粟作、蝦夷地では正徳年間に近き頃より西海岸のセタナイよりシクツシ辺の間、東海岸のオシヤマンベよりシラヲイ辺まで粟を作るようになつたのが最も早いようである。水田耕作では少くも貞享二年文月村字押上にこれを見たと伝えられるが、記録では元祿五年亀田に試作され、以来数度に亘りこれを試したが失敗多くして墜絶を辿る一方であつた。その他の産業については殆ど見るべきものはなかつた。しかるに本島経済発展の根本を成す蝦夷地場所における和夷の交易上にこの発展動機を賈す大きな変化が起り、本島経済は漸く勃興の機運に赴いた。次は勃興時代である。

【勃興時代】 当代の特徴は享保に近き頃より「場所」における蝦夷交易は知行主の直支配より漸くこれを請負う場所請負商賈の手に移り、彼等の資本的企業の活潑化が見られ、本島経済は斯業の勢力に支配せられ、産業また他に見るべき発展も起らなかつた事に把握せられる。

前代（即ち準備時代） より当勃興時代へ移行したのは、要するに仮令知行主が蝦夷交易を営んだといつても、結局は唯僅少の利鞘で蝦夷と商人との仲介をなしたに過ぎなく、その仕込や蝦夷地産物の売捌方一切は、皆資本家的内地商人の差配する所であり、又商賈はその上更に

藩の仕送り迄も引受けるようになって、彼等の勢力は弥々増大して来た。爰において「常に万里の波濤をわたつて其利を射むとする」(地北) 彼等商人の事とて機会だにあらげその企業の立場を一層有利に展開せんものと、虎視眈々たるものがあつた。一方知行主の蝦夷交易は、享保近くとなつて蝦夷地不漁となるや、兎角損耗多くなり、さりとて松前氏としては假令封建的権力はあつても、財力においては知行取をして搾取階級として立たしめる程の余裕も無かつた為、商人より債務を負うた知行主中には、その弁済の方に場所の交易を彼等に託し、その料金を以て負債償却を計る者、商人勢力の増大に相俟つて知行主自から交易を行はず、これを商人に請負はしめ已は坐して料金を取得するを得策と考ふる者等の出現や、又多くの場合は高利貸の商人等は、知行主に日用品の供給や金銭の融通をなし、年末に至つて場所引請料金と差引計算するという傾向が、場所請負の形式の下に行われるようになり、夫が制度化して本島経済発展の中心勢力として、遂に勃興時代を生成せられる勢となつたからである。

当代に在つてはその発展の中心勢力を成したのは場所請負人であり、その制度は内地には曾て見られなかつた本島独特の政治・経済社会制度であつたが、これが運営機関たる運上屋の支配人・番人等は「猶官人」(終北録) という威力を發揮し、この勢力は場所請負人の資本主義的企業発展を支配すると共に、この発展に伴い蝦夷の経済生活をも左右し、和人は有利に蝦夷は不利にと両者の利益は反対の方へと移行し、当代を終幕せしめる一大原因ともなつたが、而も斯かる原因は斯く当代成立内容そのものの中に、既に胚胎していた事が先づ注目せらるべきであり、而も運上屋係員等は何故斯かる勢力を有したかの理由に關心が払われる。これに対する私の推考としては、即ち松前氏は元来和人よりは徴税したが、蝦夷よりはこれを徴収しない建前であり、これに代えるものは要するにその交易より生ずる利益であつたが、場所請負制は実は知行主が場所における蝦夷交易権を商買に譲り、知行主に代つてその交易より生ずる一定の利益(和人れげ運)を挙げ、これを知行主へ納付することをこの商買に請負はしめることを謂うのではなかつたかということである。而して納付した運上金の残余は請負人の取得となる訳である。その故にこそこの場所請負人を運上請負人といひ、運上金ともいふべきものを生み出す所の交易所を運上金又は運上木屋と称したのであり、従つてその収税吏員たるべき運上屋係員が恰も半官半民の権能を自然持つようになつたのも、またこのところより発したのではあるまいかということである。場所経営上における当代の特徴には、先づ交易形式の一として、従来の即座的な交易の外に「前貸制」が現れて来たという事で、少くも寛政四年頃宗谷場所では、イリコ交易においてこれが行われ

ていたが、前期資本主義時代の企業形態に見られる一現象として注目されるべきであらう。而してこの前貸制は纏てその負債方に蝦夷へ労働を強制し、次の原因と共に蝦夷交易制より蝦夷使役制へと移行もせしめた原因ともなつたであらう。即ち次の原因というのは請負人等は生産技術が進歩し、資本力が増大し、他方寛政元年の蝦夷乱以来蝦夷の勢力も取り分け失墜して来るやうになると、従来の迂遠な蝦夷交易に依る利潤で何時迄も満足している訳はなく、寧ろ蝦夷を使役して自ら漁業を経営する事が一層有利と考えたであらう。その結果は事実彼等は従来専ら蝦夷交易に拠つたものから当代に入ると蝦夷を使役し、自から漁業をなすという商人の漁業家化した地方も出現した。従つて蝦夷としては、これに依つて従来交易に依つて独立の生活を営んだものから被使役者へと転落し、和夷富の分配は益々不公平を生ぜしめることゝなつた。又内地商人の資本主義的活動は場所経営におけるばかりでなく、松前百姓(百姓とは松前では漁民を謂う)と追餅取り名義の蝦夷地出稼人に対し資本の融通をなし、その為前者は従来の自足経済より脱して企業者化し、後者はその仕込を受けて餅取の中心は和内地より漸次蝦夷地へ移動した。而もこの南部・津軽・越後等からの出稼は彼等もこの稼無ければ生計立ち難く、請負人等も彼等入込まぬ時は産物も上らずとて彼我相離るゝ事の来出ない裸を成したことは、日本経済史の一環としても見逃せない現象といわねばならない。斯くして前代本島経済の中心勢力を成していた獣皮・干魚は当代の交には替つて干鮭・塩鮭中心となり、次に鱈、次に鮭(肥料)次に鮭及び鱒のメ粕中心へと移行し、この間を長崎俵物の勢力が沿逆しつゝあつたかの概を思わしめた。農業特に水田耕作は前代松前藩でもその試作は重ねて来たが失敗多く、また当代も天明へかけてこれを試みまた成果上らず、遂に国策に適せずとて断念するに至つた。当時における失敗の原因には氣候の寒冷、試作に熱心さを缺いたこと、試作技術が成功する迄に要する多くの労資が続かなかつた事等が為政者や識者の中に唱道された。蓋し氣候の寒冷については当時誰もが唱へた観方であるが、併し試作を重ねている間には成功の歳も屢々有つたのであるから、これは根本的理由にはなり得ない。試作に熱心さを缺いたのは古来よりの漁業依存の觀念強きに加えて内地より半数が豊富に移入されたからであつたと思われるが、併し仮令試作に意を注がんとしても最後の理由たる試作技術が成功する迄に要する多くの労資の続き難い所に帰結するのであり、要するに松前氏の幕府への報告たるこの最後の理由こそが當時では最も根本的原因ではなかつたかと考えられる。畑耕作は不漁のために各地に亘つて漁業と兼営的に、あるいは全く專業的にその勃興を見、而も自給目的ばかりでなく企業目的にも耕作するところもあるに至つたが、これは当代農業の一齣として見逃せない事象であらう。しかし当代本島

経済全体として見る時は、何れにしても漁業中心で、漁業の他産業に対する支配力は「松前蝦夷地産物いたりし多しと雖も就中多きものは鮭を第一とす（略）又金高の多きは鮭漁にしく事なくこの二つの漁にて此地の飲食衣服に余りありといふ是によりて其外の國益は起りかたし」（東遊記）「土人云（略）凡鮭獵は（略）わづかの日数にて数百金を得る事なり（略）是に依て耕耘の業の如き迂遠なる事は一人も是をわづめず年中辛苦の日を送らんよりは平座にして衣食にみてんにぞしかじ」（東海参譚）との一語に尽きると思う、再びこの語をここに想起する。

知行主の蝦夷交易は初は対等であつた。しかるに時の経過と共に知行主に従属する商人等の蝦夷への搾取が漸次甚だしくなり、加うるに恰も中国人の先入観念として採取時代民に対し、一步進んだ農業民である事に一種の優越感を懐いた中国思想に共通したところ有つて農業国育ちである和人は兎角原始的な低級生活を営んでいる蝦夷を侮蔑し、これから割出された搾取の傾向が強くなり、遂には虐使とも化し、其結果より生じた蝦夷の怨恨と結び付いた国防問題解決策ということが表面的な理由、また徳川氏は窮迫した財政救済の為に封建経済に結び付いた独占資本家たる場所請負人等がその収益を漸次、巨大に膨脹せしめる一方であつた従来の実情に着目し、府庫救済資源をこの本島に索めんとした魂胆が裏面的理由として表面的理由よりも寧ろ基礎的に表面的理由と悟み合つて、寛政十一年遂に本島は幕府直轄となり、東蝦夷地は官の直掬としてわが国にも未だ嘗て経験した事の無い官營の大企業が実施せられ、組織が発達して本島に勃興しつゝあつた前期資本主義経済活動に更に拍車を加え、その後種々な動機が錯綜して進歩もあり、弊害も出で發展は漸く爛熟時代を形成せらるゝに至つた。

【爛熟時代】 先づ最初における幕府直轄期である。本期の特徴は曩に一言触れたが、官が本島東蝦夷地の場所請負制を廢してこれを直掬とし、強大な資本力と組織力と智力とをもつて従来わが国にも見られなかつた一大企業が試られ、その結果本島経済の中心勢力を成す漁業上蝦夷地場所では、前代に比較にならぬ程拡充された施設と和人方の蝦夷支配力を増強し、漁産額大いに増加したことに把握されよう。

本期幕府の本島直轄の目的は国防に在つたが、而も夫は露西亞の進出が千島を中心として起つた事としてその通路たる東蝦夷地の経営に最も重点が置かれ、従つて東蝦夷地経営の骨子は国防の目的上から前代の場所請負制に見た蝦夷に対する弊風を除去し、蝦夷を懐柔して

外国への風靡を事前に喰い止めようとするのが狙いであつた。その対蝦夷弊風改正の実施として幕府は、蝦夷交易や使役において柵目秤量の不正改善、蝦夷向交易品数量の増加及びその品質の改善、蝦夷の鉄錢通用、蝦夷交易価格の公定、蝦夷への手当給代の制定、蝦夷救恤等を始め鋭意改良する所多かつた。その結果蝦夷も大いに喜び、漁業に励み、漁獲高も前代とは大いに増加するに至つた。(記)下「蝦夷雜」
斯くして幕府は根室場所の鮭、択捉場所の鱒漁獲に大規模な経営を試み、その他奥場所の開墾に及んだ。奥場所開墾は前代後期以来の傾向であり、これは資本力とその利用の増大し行く結果として近場所以南の漁獲情態では満足されず、勢い奥場所の豊富な漁獲物に着目せられた為であり、この大量生産と遠距離の内地取引先との關係は、生魚の儘では間に合はず、且つ内地需要の上にも相合せて、粕やその副産物たる魚油等に加工した方が最も有利であつたから、漁獲の大部分はこの方面に加工が試みられたのであつたが、当期は殊更上述の如く、大規模経営の下に多量にこれを製造し、江戸・水戸・仙台等へ直送した。直送は前代では僅に六箇場所尾札部の新鱒を江戸に直送したのみであつたが、本期になると斯く奥蝦夷地にもこれを見るに至つた。以上蝦夷待遇改善に依り、又前代迄行届いていなかった奥地漁業開墾に依る著しい漁獲高の増加は、また本島経済発展の一勳として注目せらるべきである。次に前代水田開墾が試みられたが成功せず纔に漁業の余暇に粗放的な畑作が行われていたに過ぎなかつた農業は、当期に入つて国防開拓の一として、識者の重農思想よりした輿論に相俟つて、幕府の深い関心事ではあつたが、依然漁業に重点が置かれ、著しい差達を見なかつた。何となればこれが実施には、必然内地より開拓民を移植せしめなければならず、その実これを彼地に求める事は、封建の時世としては容易な業ではなかつたからである。併し唯試験的程度としては、北海道農業発展史上看過し難き二、三のものがあつた。即ち

先づ和入地では、箱館奉行は函館附近に畑地開墾と共に墾田を企て、文化度に入るや一帯百数十町歩の墾田をなし成功を見たる如き、又自費開墾出願者には土地を割渡し、多く用達・豪商等の資力を有する者に依つて開墾されたるが如き夫であつた。しかし斯うした折角の勃興も、その後凶作打続き概ね荒廢に歸して了つた。蝦夷地においても幕府は蝦夷に農業の関心を持たしめるためにも、各場所の蝦夷地勤番をして試作をなさしめ、浦河・様似兩場所の如き殊更好成績を挙げた。又前代寛政九年大原左金吾が本島屯田兵の要道を初めて説いたが、当期に入り寛政十一年三月幕府の趣旨を奉じ、武州八王子原半左衛門以下同心等は屯田志願をなし、翌年三月白糖・鵜川兩場所へ赴任し、本島本制度実施の起原を成したものであつた。併しその後收穫少く、罹病者が続出して文化年間に入るや廢絶に歸した。畜産開

係ではこれも同じく国防開拓に關係し、字須・虻田に本島初めての牧場を設置し、南部馬を入れて増殖を図り、南部津輕馬喰の本島への進出さえ見るに至つた。又南部牛の移入蓄殖を見たのもこの時代であつた。商業では従来福山が本島政治の中心であり、東蝦夷地に遙か凌駕した西蝦夷地海産物の集散地であつたが、当期はこれに対し函館が政治の中心となり、西蝦夷地に遙か凌駕する東蝦夷地海産物の集散地と變じた為函館商業は俄然勃興し、福山は従来の独占的地位を失つた。しかるに後、幕府は政庁を福山に移したので、函館商勢の没落することなきやを懼れ、東蝦夷地産物は主として同地で集散させるようにした。併しその間にこの地ではまた將來の發展のための確乎たる交通的地盤を逐次備え、江戸との交通の頻繁化は従來の京畿地方には及ばないながらも、当期となり同地との取引を大いに増加せしめた。即ち陸上交通としては国防と直轄の關係より東蝦夷地道路開鑿に主力が注がれ、旅宿所(通行)渡船橋・駅馬も増設され駆通の制が確立した。海上では船舶の増設、江戸蝦夷地間直通航路、千島方面への航路の拡大、函館掘割及び埋立、造船場の設立等従來夢想だにもなし得なかつた大施設が試みられた。これを要するに本期幕府直轄に依る本島経営上の經濟的得失は、仮令徳川氏として財政救済上にその期待した程の成果は擧らなかつたにしても、以上官營にして始めて企図し得る大なる資本力と、組織力と智力との下に資源の開発が敢行せられ、これに關連を有つ諸施設を遺して後代に役立たしめた事は、従來に見なかつた漁業を中心とした本島經濟上の資本制的顯著な当期發展の跡として認めなければならぬ。

次は場所請負制復活に基く商人の前期資本主義的經濟發展の全盛期である。前期より当期へ移行した主因は、要するに幕府本島直轄の目的は、国防上蝦夷交易の宿弊改善とその懐柔に在つたが前者も既に一掃され、後者の目的も略々達成し、而も官營は民營に比し財政上に利する望みも薄きより、更に強いてこれを継続すべき理由もなくなつたからである。仍つて文化七年よりは再び場所請負制を復活し、尋いで文政四年十二月には松前氏に対し従來の主法を能く守るべき旨を諭達して本島を復領せしめた。

当期の過程として注目せられるは前期幕府の直擲に依つて大規模な高度の施設が加えられ、蝦夷懐柔と施設上多くを要した雜役的蝦夷労働者化の促進は、蝦夷をして一段と隷屬化せしめ、これ等の任務は請負人配下に負はしめられていた結果、その遺業を引継いだ当期の場所請負人等に在つては、以前に比較し得ない程拡充された施設と蝦夷支配力をもつて場所経営に臨み得たのであつた。又場所を請負はじめる方法としては、以前の場合では請負は指名であり、請負人の資力次第で一人にて幾場所でも兼營し得たが、当期では幕府は入札制

を採り、場所の大小に依り請負場所の数を制限した。この制限は少くも小資本家保護の目的より出たものであろう。又本期に至れば場所にならず廃合整理が行われた。蓋しその理由は前代に在つては松前氏は家臣の知行として夫々場所を分割給与すべき必要があつたので、例えば千歳川添、ユウフツ十五箇場所（ロウサン其他）は寛政十二年より会所一箇所に、右符河流域は松前藩時代十三ヶ場所にも分轄していたが、幕府は西蝦夷地直轄中文化八年より三人請負に、更に文政四年よりは阿部屋伝次郎一人請負に統一し、尙この外東蝦夷地アイロ（シラヲ）場所は廃せられ、シブチャリ・上ハイクロ・下同・メナシクロもシツナイ場所に、シラマカ・クスリ両場所も一場所に併合するに至つた。蓋し当期の如き幕府直轄となれば、最早前代のように一々藩士へ知行として分与しなければならぬ必要がなくなつたからである。

次に本期の産業は既述の如く漁業以外に記すべきものはなく、斯業は年と共に盛んになり、而も鮭漁はその中心勢力を占めていた。本期の斯かる發展には、江差・福山地方の鮭不漁の回復にも因つたが、一面には天保の飢饉に依る奥羽細民の神威岬以南の近場所移住やマシケ以北の奥場所への二八取（島小牧以北は取獲の二割を、瀬棚以南は同）の進出が盛んになつた結果であつた。蓋し奥羽にしては凶作の打撃は、耕作経営者よりも彼等に使役せられた日雇労働者の方が深刻であつたであらう。何となれば前者では食糧確保にお余力を有したが、後者では手近な山野は既耕地となつており、自然物採取すらも望みはなかつた。これに反し、本島では山海にこれを求めんとすれば猶その余裕があり、又一方では両地間の地理的差異より彼地に水田耕作にとりかゝる以前本島に鮭取出稼をなし、一儲けし得るといふ季節的利用を試みた細民も少くなかつたであらう。併しこれら細民の進出を可能ならしめたのには、裏面に場所請負人等がこれら移民流入の救済で一時は厄介でも勞力不足の折とて利益も少なくないので、彼等に対し場所内出稼許可の出願や米増貸付を為す等資本家としての活動が有つたことを忘れてはならない。これらの關係はこの結果より生じた人口増加に基く西蝦夷地へかけての商業發展に相俟つて北日本經濟發展史上特筆せらるべき事象であつたといはねばならぬ。

わが国では十七世紀（寛永年間）鎖国政策を実施してより二百余年間、外はもつて海外先進諸國勢力が未だわが国に直接接近することなく内はもつて封建的威力が継続した為、後代に従ひ封建制に對立する諸種の矛盾に悩まされながらも、鎖国政策は蔽として永く固守を続け得たが、当代末期嘉永頃より俄然歐米資本主義勢力の直接進入に依り開港が強要せられ、わが国はここにおいて漸く封建主義の經濟より脱して、日本資本主義の成立へと發展する上に最も重要な契機となり、明治へかけてその成立への過渡期としての商業中心の前期

資本主義經濟發展期が構成されねばならぬ情勢に引摺られる事となつた。

抑々米英列強が本島に最初開港を要求したのは、当時彼等が近海に盛んに試みつゝあつた漁獲船(捕鯨や密漁)に薪水補給の便を与へしというに在つて、そのため翌安政元年三月米國を初めとした和親條約が締結せられ、函館は下田と共に開港として撰ばれ、薪水石炭等缺乏の時のみその補給をなす事となつた。しかし彼等の開港強要の眞の目的は、彼等は資本主義國として商品市場開拓のためにわれに臨んだのであつたから、同五年六月には更にまた修好通商條約締結へと發展し、爰にまた函館はわが國六開港中の一となり、日本資本主義經濟成立過程への第一歩として踏み出したものである。併し当期の發展過程には、この外界よりの關係ばかりでなく、これを動機とした内的關係としても大なる一面があつた。即ち列強の帝國主義侵略へ対抗し、領土の保全を目的として断行した幕府再度の本島直轄下における場所請負商賈の活動、幕府の殖産興業奨励とその実施であつて、これらは外國關係としての函館開港を契機として、本島産業に大きな發展を約束したのである。

先づ後者に在つては、安政二年二月幕府は再度本島を直轄した。その理由は以前の場合と殆ど同質であつたが、唯以前には露西亞の進出が千島であつた所より東蝦夷地經營に重点が置かれこれを直摺とし、拓殖事業は難事として専ら蝦夷交易の改善を主眼としたが、本期では樺太中心の進出とて、西蝦夷地經營を重点とし、以前の経験よりであると思われるが場所は請負制を其儘とし、蝦夷交易よりもその使役に重きを置き、蝦夷をば請負人の隸屬關係より箱館奉行の所管へ移し、殊に以前直轄の時重点を置かなかつた拓殖事業が、本期に最も主力を注がれる事となつたのは当期における幕府直轄の特色であつた。斯くして場所を中心とした漁業關係では、場所請負人等は西蝦夷地神威岬婦女航行解禁で、前期とは更に一層奥蝦夷地へ殺到した鮮取出稼人や土着者に資本の融通をなして彼等に能く漁業を営ましめ又網切騒動惹起せしめた鮮大網使用も解禁を得、奥地浜益場所迄の間斯漁有るところ一帯に新村落さえも見られ、産額大いに増加した。しかし反面これらの為労働者を甚大にし、請負人等の資本家の勢力は益々増長し、労資階級の分裂を一層大ならしめるに至つた事が注目されねばならない。鮭は前期の干鮭時代より塩引時代を出現し江戸を中心、筋子は塩切鱈と共に大阪中心に、メ粕は山越内以北より殆ど広汎に亘つて移出を見た。長崎俵物は本期よりは函館より支那直輸出となつた為価格騰貴し、これに刺戟せられて昆布の如きその採取高を増加し、鮑煎海鼠も初めて自由販売の許可となつた為、また価格騰貴し、濫獲の弊も生じた。その他干貝・干鮫・鳥賊(即ちメ)

も支那輸出として活況を呈するに至つた事は、当期外国關係に結ばれた影響として特に注目される。農業に在つては国防を中心に幕府は産業中の首位を占める漁業よりも、薄利な農業に保護発達を加へしとして、四民の蝦夷地移住により開發に當るべき方針を布告した事は、以前本島直轄の際は漁業を主とし農業を従にした方針とは違つた本期としての大きな特徴といえよう。斯くして官自らも「御手作場」と称し、家屋・食糧・夜具・開墾資金の貸与給与・租税の免除等を為し、官營を試み或は勸農掛を置いて民間への奨励指導にも当らしめた。民間でもこの趣旨を体し、団体の外個人としても進んで蝦夷地へ移住開墾に従事する者少なくなき、而も特に開墾地には安政六年制を設け和人和人、蝦夷地蝦夷に對し、開墾者に所有權を与へ、自由処分を初めて公式に認めるに至つた。またもつて注目し置くべきことであろう。団体開墾としては東本願寺の龜田村字桔梗野、西本願寺の濁川村が最も大規模で、而も前者は成績良好を示し、又、奥羽六藩中では庄内藩の如き浜益・苫前の奥場所の墾田までも試みた。又幕府の既完方針であつた屯田開墾では、石狩原野・室蘭地方・函館近在にこれを見、斯くして活潑な開墾は当期に至つて初めてこれを見たのであつた。以上の開墾と共に本期の新興作物として特筆すべきものに粃種として後代本道米作の基本を成した大野種赤稻の外、白蠶・武州二合半領種・六分日稻・玉川シナズモチ・越後種モリクチ・ユビ手・米山糯・会津早稻・沢田早稻・宝早稻・極早稻・四十日早稻等が内地より取り寄せ試作せられたものあり、粃種以外では馬鈴薯・紅豆・胡麻・朝鮮人參・烟草・藍・苧麻・漆・桑・楮等の栽培が数えられた。斯うした作物の新興また幕府勸農の影響の一であつたであろう。畜産では牧馬は従來のウス・アブタ牧場の外浦河場所にも牧馬に刷新を加へ、従來の数の増加よりも質の向上に重点を置き、良馬の増殖・馬匹普及の外幕府財政の目的より南部津輕の馬喰を招徠して馬市を開催し、これが本島での起原を作り、更に民間私有の禁を解き、益々利用増殖するを得た。牛に對しては外国人の食糧用として要請があり、函館に獣畜場を設けてこれを飼育し、その需要に應じた事や、畜種の外国輸入は共に外国關係に繋つた当期としての勃興事業であつた。鋳業に在つては欧米帝國主義進出の對抗として内地におけると同様熔鋳炉・反射炉の築造・石炭硫黄の試掘あり、工業ではこれも同じ目的よりした西洋型船の建造あり、軍艦建造の計画あり、写真術伝習等と共に外国智識の影響からで、未だ一つの試験的程度には過ぎないにしても、内地における急先鋒鹿兒島藩・山口藩等に恰も相對時したかのような形で従來未智の西洋式生産様式に植へつけられた新生面を飾るのであつた。又国防に最も關係した一面たる陸上交通では、以前直轄の時手をつけなかつた西蝦夷地と東西兩海岸を繋ぐ道路の開鑿は、殆ど場所請負人の負担において完成せしめ、

駒馬の拡充と共に本島一円の交通を便にした事も特筆しなければならない。

最後に函館開港に基く経済発展への影響である。内地では輸出入額殆ど大差ないながらも輸出は常に遙か多かつたが、函館では全然輸出が主で片手貿易の観があり、大体英米兩國の商船を仲介しての清国への取引であつた。輸出品はその額及び種類は到底内地には及ばなかつたが、横浜と同様函館は後背に生産地を控えていたので、輸出入貿易には有利の地位に在つた。輸出品の種類としては資本主義諸国の要求した内地の商品は生糸を第一とし、貴金屬・絹又は綿織物・蠶等の工業品であつたが、本島では大体水産物を主とし、狩猟物・農産物・林産物・鉱産物等の原始的生産物に多少加工したものに過ぎなかつた。開拓の途上に在る本島としては、俄に当期の如き躍進的地位に置かれようとも夫は当然の段階であらう。長崎俵物三品は函館直輸出となり價格の暴騰した事は既述の如くであるが、その為輸出量に更に拍車を加え、昆布の如き安政六年四千石であつたものが、文久三年にはその十倍即ち四万余石にも跳上つた。入港の貿易船舶は安政六年より文久三年に至る五カ年間平均では米英最も多く、その他は極めて僅少、軍艦では露國、俄船では米國が絶対多数を占めた。又仮令貿易の試練期と雖斯かる積極的的交易時代に刺戟せられての一快筆は、箱館奉行堀利熙外三名が、文久元年二月西洋型函館丸に搭乘、露西亞・清國へ出航し、交易と視察とを果し帰航し、わが國會での南方進出に対し北方日本よりの対外進出として、本邦貿易上の一頁を飾つたことが挙げられよう。しかし小規模な封建経済の下に生産された物産の数量には自づから限度があり、俄に國際的資本主義市場への商品に急転し行くとすれば、そこに必然国内商品の潤渴とその循環關係において全国的な物価騰貴を招徠するに至つたが、本島としても函館開港の結果本島産商品の躍進物輸出で、請負人やこれに關係の一部商人のみは莫大な利益を贏ち得たとしても、一般民の生計はこれに依つて一大苦痛を感ずるに至り、生活必需品の値下げ或は直輸出物中に制限を設け、その防止に暇なき状態に至らしめ、金貨の海外流出に依つては物価騰貴、外貨使用不慣の為の兩替制度も設定しなければならなくなつたものである。

幕末開港に依り先進資本主義列強との接觸で、わが國に醸成せられつゝあつた封建性への対立を表面化し、これを動機に遂に幕府は倒壊し、近世國家としての明治政府は樹立され、資本主義経済成立への関門が開かれ、在来の封建制資本主義経済段階から日本資本主義経済成立への過渡的段階へ入り込むこととなつたが、その結果本史全体を通じて長期に亘り本島金権商權を一手に掌握し、本島経済界を根本的に支配し來つた封建制下の資本主義経済活動の代表者たる場所請負人も、自然明治二年十二月布達に依るこの制度の廢止で漁業又は

商業の單なる一企業家として明治新制度支配の裸に活路を見出さねばならなくなつた。しかし假令封建制時代の本島旧經濟事情が明治新制度へ突入したとはいへ、直に近代資本主義成立時代へ入り込んだのではなく、その到達迄には更にまた過渡期として内地と同様大日清戰爭に至る約二十年余が費され、この間官に資力乏しければその勦業・開拓の大企業には開拓便は豪商の活動と不可分の關係をもつて進めて行くのであつたが、旧經濟諸事情としてもまたこれに溶け込みながら近世資本主義經濟成立へと進むのであつた。

三、結 語

これを要するに新日本に住する北海道大島の明治維新前經濟の史的發展過程は、全体を通じて内地の農本時代に対し漁獵を主とした採取經濟時代であり、加えるに松前藩の成立以前より重農主義の高度に達し、而も交換經濟も貨幣經濟にまで進歩していた内地の大和民族に接觸し、本島住民は疾くから交換經濟に入り込んでいたが、この時代には未だこれが經濟生活の支配勢力ではなかつた。其処へ本史の対象となり始める豊臣秀吉の天下統一、松前氏の立藩頃より江州商人を主流とした内地の前期資本主義的勢力の進出が表面化し、遂に漁獵と商業とに結ばれた場所請負制度を中心とした内地商賈の活動に依つて内地とは獨特の經濟發展が明治へと進められた。併し勿論この發展は内地と同様依然前期資本主義的時代よりは一步も脱してはいなかつた。しかるに先進資本主義的歐米列強の商品市場開拓目的の急速的な強要に依る開港で、わが國經濟には資本主義的に一大転換期を孕むに至るや、その開港の一翼を荷負つた本島經濟また同じ運命に置かれ、わが國經濟勢力の圏内に新活動を開始する事となつた。斯くして爰にわが國を支配した封建制度は崩壊し、前期資本主義經濟發展時代は明治維新と共に更に資本主義的國際經濟社会の仲間へ突入する時代へと移行し、同時に日本資本主義經濟成立過程へと直面したが、本島經濟またこの圏内において明治維新前とはその進路に更に新生面を開くことゝなつたものである。

(昭二八・四・一一)